

巻頭言

杏林大学医学部病理学教室
柴原 純二

当方の担当する医学部病理学教室は基礎医学教室に位置付けられているが、在籍者の大半は病理医の仕事を主な任務としている。臨床業務としての病理診断は、第二次世界大戦後に米国を中心に発展し今に至っているが、顕微鏡を用いた病気の観察自体は、学術目的であった時代から100年以上変わらぬ手法である。ここへきて、いわゆるバーチャルスライド（病理標本のデジタル画像）が教育・学術用途のみならず、診断現場においても広く活用されるようになり、画像解析技術の飛躍的進歩もあって、日常診断業務へのAIの本格的実装も近い将来のことと感じられる。また、次世代シークエンサーの開発以降、加速度的に解き明かされる分子遺伝学的知見を元に疾患の再編や細分化が進んでおり、診断業務における分子遺伝学的検査の比重も年々増してきている。今後も「病気の診断」が病理医の役目であろうが、その中身は大きく変容し、備えるべき能力も今とは異なってくることは必至である。このような時代にあって、若手教室員に提供すべき教育機会について考えることが多くなった。

医学部生の教育はより難しい。本年度から教務部長の重責を仰せつかり学生教育について考える機会が増えたが、急変する現代にあって、数十年に亘る現役生活に備えて医学部生は何を身に着けるべきであろうか。『未来人材ビジョン』（経済産業省・令和4年5月）は「注意深さ・ミスがないこと」、「責任感・まじめさ」、「信頼感・誠実さ」以上に、「問題発見力」、「的確な予測」、「革新性」が今後求められる能力としている。一般社会と医療業界の事情は当然異なるが、深い思考力が基盤となる後者が良き医療人にも不可欠であることに異論はないであろう。医学部のディプロマ・ポリシーでは、学生が身に着ける能力の一つとして「問題解決能力・リサーチマインド」を掲げており、時代に適った目標と言えるが、然るべき到達点を本格的に目指すのであれば、現状の教育の内容や実施法には大きな改革が必要であろう。お叱りを受けることを承知の上で個人的見解を申せば、物事を変える力やそれに必要な意思決定の迅速性は、先進的企業＞一般企業、行政機関＞大学の順にあり、推進力のある企業に一任すれば、時代に即した医学教育も速やかに実践可能ではないかと思われる一方、逐一に煩雑な手続きを要する大学では事が容易には進まない。未だ手探り状態で教務部長の任務にあたっているが、先輩方の築いてこられた確かな流れに乗りつつも、時に無理筋の提案をして少々方向転換を企てみるのも当方の役目であろうかと近頃愚考している。

本来の学問的必要性からかけ離れた形で医学系雑誌が増加の一途を辿る中、杏林医学会雑誌の役割は何であろうか。教員にとっては日頃知る機会の少ないお隣の研究者の活動に接する良い機会となっているが、学生にとっては最も身近な医学誌であり、彼らが能動的に学問に関わり、思索の機会を得る存在にもなりうるだろうか。そんなことも考えながら本号を拝読したい。